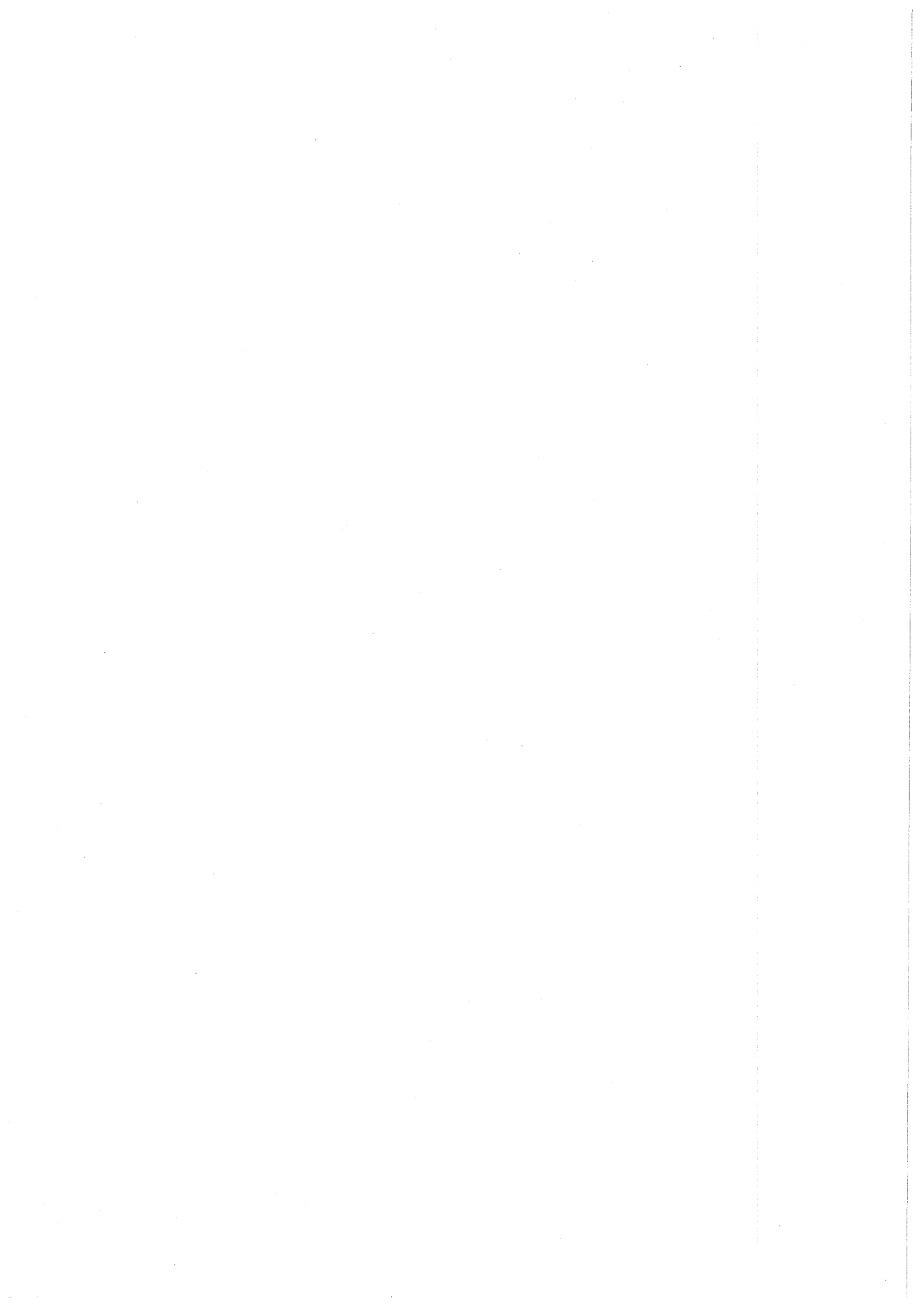


青 山 史 学 第 三 十 一 号
二 〇 一 三 ・ 三 ・ 三 一
別 刷

中央ヨーロッパの歴史と政治における言語

トマシユ・カムセラ
(割田聖史 解題・訳)



中央ヨーロッパの歴史と政治における言語

トマシユ・カムセラ

(割田聖史 解題・訳)

著者紹介・解題

以下の論文は、トマシユ・カムセラ (Tomasz Kannusella) 氏の論文
“Language in Central Europe’s History and Politics”の翻訳である。

カムセラ氏は、一九六七年ポーランドに生まれ、現在スコットランド
のセント・アンドリューズ大学で教鞭をとっておられる。氏は、言語政
策、ナショナリズム、エスニシティへの多大な関心に基づき、インター
デイシプナリーに多様な研究活動を行っている。

二〇〇九年に出版された *The Politics of Language and Nationalism in
Modern Central Europe* (Foreword by Professor Peter Burke) (Basingstoke,
UK: Palgrave, 2009) は、千ページを超える大著であり、カムセラ氏の研
究の現在のところの到達点であるといえよう。

また、カムセラ氏は、少数者言語に多大な関心を持っており、シロン
ゾク語 (シロンスク語、シロンスクとはシレジア (英語)、シュレージ

ェン (ドイツ語) に関する著作も公にしている。 *The Szlonszoks and
Their Language: Between Germany, Poland and Szlonszokian Nationalism /
Szlonszocy (Słazacy) i ich język pomiędzy Niemcami, Polską a szlonszkim
(ślaskim) nacjonalizmem* (Zabrze, 2009) .

このようなカムセラ氏の関心は、科研費基盤研究 (B) 「帝国・国民
国家の境界と言語」 (代表：平田雅博) のテーマと重なるものであり、
二〇一一年七月九日に “The Cultural and Social History of the Silesian
Language” 翌七月一〇日に “Language and Nationalism in the History of
Modern Central Europe” という題目で講演会・ワークショップを開催し
た。前者はシロンゾク語に関する報告、後者は中央ヨーロッパにおける
言語と政治を広範に取り扱う報告であり、それぞれ活発な議論が行われ
た。

ここに訳出した論文は、七月一〇日に行われたカムセラ氏の報告の一
部を構成している。氏の報告は、大著に基づいたものであり、きわめて
長大かつ資料も膨大であった。そのため、氏の既発表の論文の中から適

切なものを選択することとした。

本論文の概要を述べておく。まず、中央ヨーロッパの空間的範囲が設定される。続いて、前近代の中央ヨーロッパでは、言語ではなく、宗教がそれぞれのアイデンティティを規定したことが指摘される。そして、一九世紀にナポレオンによってナショナリズムを持ち込まれた後は、言語・国家・国民を一致させるという「エスノ言語的規範」を持ったナショナリズムが発展した。しかし、この地域には、この「規範」とは相反する帝国（さまざまな言語集団を包含している）が存続していた。これらの帝国は、第一次世界大戦後に崩壊し、そこには「言語的国民国家」が成立した。そして、第二次大戦後成立する共產主義体制は、実際にはこの「規範」を押し進めた。さらに共產主義崩壊後には、中央ヨーロッパ中でこの「規範」は一層強まり、チェコスロヴァキアやユーゴスラヴィアといった複数の言語を抱え込む国家はその命運を終えることとなった。そして最後に、従来はそれぞれの国民国家における「方言」「少数民族言語」とされてきた言語が復興しているという現状を概観し、現在における「エスノ言語的規範」を批判的に捉えている。

「エスノ言語的」という術語を用いて中央ヨーロッパを概観するという本論文のスタンスは一見、かつてのナショナリズム論に先祖返りしているように見える。しかし、カムセラ氏の議論は、「同型性規範 (Normative Isomorphism)」という概念を用いて、エスノ言語的ナショナリズムにおいて本質的とされてきた言語と国家の結び付きを、操作可能な関係性へと変化させることで、国民国家の根本を批判しているもの

である、と訳者は考えている。

その意味において、本論文は、カムセラ氏の議論のいわば「叙述部分」のみであり、あくまでも中央ヨーロッパの歴史的・言語的諸状況の概観である。「同型性規範」といった「方法論」については言及されていないため、その紹介は別の機会に譲ることにしたい。

本論文は、短い叙述の中に非常に多くの情報が入っている貴重なものである。初出は、*Nationalities Affairs (Sprawy Narodowosciowe)* 34 (2009) である。その *Journal of Globalization Studies*, Volume 2, Number 1 (May, 2011) にも手直しをして掲載されている。後者には、*“From the Rule of cuius regio, eius religio to the National Principle of cuius regio, eius lingua?”* という副題が付けられており、その問題設定がより明確になっている。訳文は、初出のものを基礎にしつつ、訂正部分や状況による変化 (特にコソヴォ情勢) に関しては、後者を参照した。

また、少数民族言語を独自の言語としてとらえるのも氏の特徴である。論文の後半に出てくる聞きなれない言語の大半は、従来はその国家において、「方言」とされてきたものである。例えば、ポーランドのシロンゾク語はシロンスク方言、クロアチアのカイ語、チャ語は、通常はカイ方言、チャ方言と理解されているものである。しかし、氏は、「方言」として理解するのを拒否して、独自の言語として扱っている。このことも、国家と言語 (特に国民語) の一義的な結び付きを批判する意図を持っているといえよう。

◇ ◇ ◇

中央ヨーロッパにおける多言語主義

中央ヨーロッパには多くの定義がある。本稿では、中央ヨーロッパは、大陸の中央部三分の一、もしくは、西はイタリアとドイツとオーストリアのドイツ語政治体、東は多言語的なロシア連邦によって区切られる地域とする。スカンディナヴィアは、別の論考を記したので、本稿では除外する (Magosci 2002: xi)。

今日知られているような中央ヨーロッパの全般的な言語的輪郭は、一〇世紀のドナウ川流域へのハンガリー人(むしろフィン・ウゴル系とテュルク系エスニック集団の混合体)の到来と一四世紀のワラキアとモルドヴィアのロマンス語の諸公国(すなわち、今日のルーマニアとモルドヴィアの祖先となる)の建国の間に形作られた。この地域の中では、フィン・ウゴル系言語であるハンガリー語とともに、東方ロマンス語であるモルドヴァ語とルーマニア語が、黒海からドイツ語圏の一部であるオーストリアにかけて話されている。この多言語的な地帯は、北と南のスラヴ方言連続体 (continua) に分けられる(連続体とは、言語がその地から他の地へ徐々に変化する地理的に連続する地域である。二つの連続体が出会うところで相互理解不能 (incomprehensibility) の裂け目が生じる)。現在、前者は、ポーランド語、チェコ語、スロヴァキア語、ベラルーシ語、ウクライナ語、ロシア語であり、後者は、スロヴェニア語、クロアチア語、ボスニア語、セルビア語、モンテネグロ語、マケドニア語、ブルガリア語である (Schenker & Stankiewicz 1980)。

地中海とボスポラス海峡で終わる中央ヨーロッパの南端では、アルバ

中央ヨーロッパの歴史と政治における言語

ニア語とギリシア語というインド・ヨーロッパ語の孤立体 (isolate) (相互に理解できない言語であり、起源も異なる) は、テュルク系言語の連続体の一部であるトルコ語と肩を接している。なお、テュルク系言語連続体はカザフスタン、中央アジア、中国西部に及んでいる。中央ヨーロッパの北方では、バルト系言語の生き残りであるリトアニア語とラトヴィア語が、北スラヴ方言連続体とフィン・ウゴル系であるエストニア語との間に入り込んでいる。述べてきた言語すべては、フィン・ウゴル系とトルコ語を除いて、インド・ヨーロッパ語族に属している (Plasseraud 2005)。

宗教、言語、アイデンティティ

近代に至るまで、中央ヨーロッパの人々は、そのアイデンティティを表現するために、言語よりもむしろ宗教を選んでいた。この地域のキリスト教化は、キリスト教がリトアニアで採用された一四世紀後半に完成した。他方で、オスマン帝国の北方への拡大により、一四世紀から一七世紀に、バルカンにイスラム教が広まった。一四・一五世紀中の、追放と迫害により、アシケナージム(ゲルマン系言語を話すユダヤ教徒)は西ヨーロッパから中央・北ヨーロッパへ、セファルディム(イベリア半島のロマンス語を話すユダヤ教徒)は北アフリカやバルカン半島へと向かった。その後、世界のユダヤ人の大半(彼らはユダヤ教を信仰している)は、第二次世界大戦中のナチスドイツによるホロコーストまで、中央ヨーロッパで暮らしていた。

三つの一神教信仰すべては、聖なる書物とそれぞれの文語伝統を持っているが、それは「神聖な言葉」で書くために使われるさまざまな文字（アルファベット）によって最も視覚的に表現される。したがって、ユダヤ教徒はモーセ五書起源のヘブライ語のヘブライ文字で、ムスリムはコーラン起源のアラビア語のアラビア文字で書く。キリスト教徒の場合は、ローマ教皇に忠誠を誓う者は、ウルガタ聖書もしくは聖書の公式のラテン語訳のラテン（ローマ）文字で書く。ビザンティウムからのキリスト教を採用し、現在コンスタンティノープルの東方正教会における総大主教に最高権威を認める者には、相当な程度の多言語主義が許容された。ギリシア人（そして、コンスタンティノープルの直接の聖職コントロールの下にある初期の正教スラヴ人、アルバニア人、トルコ人）は、新約聖書の古典ギリシア語のギリシア文字で書く。九世紀半ば、大モラヴィア（今日のチェコ、ハンガリー、スロヴァキア）のスラヴ人は、ビザンティウムからキリスト教を採用したが、特有な文字であるグラゴル文字（Glagolitic）で書かれたサロニカのスラヴ語を用いた。次の世紀にキリル文字（ブルガリア帝国で採用された）は、グラゴル文字に取って代わり、教会スラヴ語として知られる言語は、正教スラヴ人（主にバルカン東部、ペラルーシ、ロシア、ウクライナ）の間に典礼言語として今日にまで残っている。

中央ヨーロッパの文脈における識字（literacy）、信仰、アイデンティティの問題に関して、アルメニアとグルジアについて述べておく必要がある。この二つの国家は、四世紀初めに国家宗教として、キリスト教を

採用した最初の二つの国家である。この出来事は、聖書がアルメニア語とグルジア語に翻訳された際に使用された特有なアルメニア文字とグルジア文字の創出を伴っていた。時とともに、グルジア教会は正教の一部となったのに対して、アルメニア（使徒Apostolic）教会はその特有の性格と組織を保持した。キリスト教と識字のそれぞれの伝統は、その特有の文字で完成した。そのため、アルメニア人とグルジア人は、その土地がビザンティウムやムスリムのアラブ、ゾロアスター教徒、後にはイスラムのペルシア、オスマン帝国、そしてロシアによって侵略された際であっても、独自のエスニックグループとして生き残ったのである。また、一世紀のビザンツと一四世紀のエジプトのマムルーク・スルタン国家による二つのアルメニア人王国の崩壊によって、アルメニア難民の波が生じた。そのため、アルメニア人は、中央ヨーロッパにおける重要なディアスポラとなったのである。大半はその元来の言語を失い、キプチャク系言語のちには中央ヨーロッパで支配的な他の諸言語を話した。しかし、近代にいたるまで、アルメニア人はすべての言葉をアルメニア文字で書いた。

中央ヨーロッパのカトリック地域では、固有の永続的な政治体の上昇とその内部の世俗権力の再肯定によって、新しい行政言語であるドイツ語（二二―三世紀頃）、チェコ語（二四―一五世紀頃）、ポーランド語（一五―一六世紀頃）、クロアチア語（一六―一七世紀頃）が、ラテン文字を使用して書かれ始めた。唯一の例外は、北西クロアチアのアドリア海沿岸であった。この地域は、カトリック・グラゴル文字による教会

スラヴ語典礼の伝統が二〇世紀半ばまで生き残っていた。中央ヨーロッパの正教地域においては、ルーマニア語が一六世紀に公務のために使われ始め、一九世紀半ばまでキリル文字で書かれた。キリル文字によるスラヴ言語であるルテニア語（ベラルーシ語とウクライナ語の共通の祖先とされる）は、一七世紀終わりまで（現在のリトアニア、ベラルーシ、ウクライナとなる）リトアニア大公国の公用語であった。オスマン帝国では、オスマン語（古トルコ語）とペルシア語がそれぞれ行政・文学で使用され、両者はアラビア文字で書きとめられた。一五世紀には、ボスニアのスラヴ語話者のムスリムの間では、スラヴ語での書記の必要性が高まったが、それはアラビア文字でなされた。アラビア文字で書かれ、一九四〇年代初頭までに刊行されたスラヴ語の刊行物は、ボスニア語の端緒として考えられる。（一四世紀にリトアニア大公国に定住したムスリムのタタール人がルテニア語とポーランド語で同様な実践を行った。）また、イスラム教を信仰するエスニックなギリシア人とアルバニア人も、その言語をアラビア文字で書いた。同様に、一五世紀初め、ユダヤ教徒は、ゲルマン語系のイディッシュとロマンス語系言語のスパニョール語 (Spanyol) (ラディノ語 Ladino) において、その文語伝統を発展させたが、書記はヘブライ文字で行われた。

中央ヨーロッパのカトリック部分においては、一六、一七世紀の新しい書記言語の発展は、宗教改革へと結びついた。宗教改革は、聖書を信者のエスニックな言語への翻訳を訴えていた。のちに、カトリック教会もまた、自身を改革しプロテスタントイイズムの広がり逆転するため

に、このアプローチを採用した。このため、プロテスタントとカトリックの翻訳者たちは、ハンガリー語を、トランシルヴァニアのオスマン領における公用語とした。また、彼らは、エストニア語、ラトヴィア語、リトアニア語、スロヴェニア語を作り出し、チェコ語とクロアチア語を再生し、スロヴァキア語を鼓舞した。しかし、スロヴァキア語は、実際には、主にナシヨナリズムという新しい力の影響の下で、一九世紀前半に形成された (Burke 2004; Fine 2006)。

カトリシズムとプロテスタントイイズム（主にルター派）による中央ヨーロッパの北と中央の分裂は、聖書の実践にも反映された。カトリック教徒はラテンアルファベットのアンチック体 (Antiqua) を使用したのに対し、プロテスタントはゴシック体 (ブラック・レター (Black Letter)、フラクトゥール (Fraktur)) を使用した。ただし、それは絶対的な規範ではなく、カトリックのドイツ語話者とチェコ話者はゴシックを使い、他方でカルヴァン派のハンガリー語話者やポーランド語話者はアンチック体を使ったりしていた。エストニア語、ラトヴィア語、リトアニア語の書籍は、戦間期までゴシック体で出版されたものもあったが、国民主義的な一九世紀には、ゴシック体の使用は徐々にドイツ語に限られてきた。

対抗宗教改革の他の影響は、ポーランド・リトアニアと歴史的ハンガリー（今日のハンガリー、スロヴァキア、ウクライナ南西部、ルーミアニア北西部、セルビア北部、クロアチア北西部にあたる）のカトリック政治体における正教徒とカトリック教会との合同であった。結果として、

東方婦一教会(ギリシアカトリック)教会が設立された。彼らは教皇の權威を認めていたが、キリル語に基づくスラヴ典礼を保持した。トランシルヴァニアの東方婦一教会教徒と正教徒のルーマニア人の場合、この変化により、典礼言語としてルーマニア語が採用され、ラテン文字が用いられることとなった。重要なことに、今日、ウクライナ人は、ギリシアカトリックをその国民教会と理解している (Barbour & Carmichael 2000; Myhill 2006: 88-90)。

近代性、言語、ナシヨナリズム

一九世紀の幕開け、ナポレオンの軍隊は、ナシヨナリズムの観念を中央ヨーロッパにもたらした。それは、国家行政の集権化、輸送ネットワーク、産業化、無料の一般初等教育、徴兵制、男性普通選挙権によって表される近代化の一部であった。ドイツとイタリアの国民主義者たちは、「エスノ言語的 (ethnolinguistic)」という形容にふさわしい中央ヨーロッパ的なナシヨナリズムの形態を作り出した。このイデオロギーは、単一の言語として構成されるさまざまな方言の話者すべてが一つの国民を形成するものである。さらに、その国民を構成すると言語的に定義された住民が居住する隣接領域は、その国民国家へと編入されるべきとされた。このような方法でさまざまな政治体から建設されたイタリア (一八六一年) とドイツ (一八七一年) の成功は、中央ヨーロッパ中に、さまざまなエスノ言語的な国民運動の勃興を促した。これらの運動は、当時それらの地域が分割されていたロシア、オーストリア、オスマンと

いったマルチエスニックな帝国の存在を危険にさらすこととなった (Gelner 1983; Hoch 2000; Fishman 1973; Kamusella 2001 & 2004)。

オーストリア帝国では、ドイツ語が一八世紀末には公用語としてラテン語に取って代わったが、君主国のハンガリー側ではドイツ語の強制に反対し、ラテン語がハンガリー王国に再導入され、公用語として一九世紀半ばまで保持された。一八六七年のこの帝国のオーストリア＝ハンガリーへのオーバーホールによつて、ハンガリー語がハンガリー王国における公用語となった。二重君主国のオーストリア側では、ドイツ語は最も重要な言語であったが、非ドイツ話者の諸領邦 (行政地域) や市町村自治体においては、クロアチア語 (セルビア・クロアチア語)、チェコ語、ポーランド語、スロヴェニア語、キリル文字のウクライナ語 (一八五〇年代、ウクライナ人に書記と出版にラテン文字を導入する圧力は結局は失敗した) が、公用語・公用語同等言語 (co-official language) ・補助言語として導入された。帝国のハンガリー側では、クロアチア語のみがハンガリー王国のクロアチア部分で公式に認められたが、セルビア語 (キリル文字のセルビア・クロアチア語)、スロヴァキア語、ルーマニア語、キリル文字のルシン語が教育・宗教で容認されていた。ボスニアでは、一八七七年にオーストリア＝ハンガリーに占拠され、ドイツ語とは別に、さまざまな名付けられたスラヴ言語 (ボスニア語、クロアチア語、セルビア・クロアチア語) が行政で使われ、カトリック教徒 (クロアチア人とされる) にはラテン文字で、正教徒 (セルビア人とされる) にはキリル文字で、ムスリム (ボスニア人とされる) にはアラビア文字

で印刷された。

ロシア帝国の西部諸州では、ドイツ語とポーランド語が公用語として使用された。前者は現在のエストニアとラトヴィア、後者は今日のリトアニア、ベラルーシ、ウクライナ中央部で使用された。ロシア語の成立は一八世紀初頭のピョートル大帝期に始まり、教会スラヴ語で非宗教的な本を作るために、近代キリル文字を使用することが決められた（グラジダンカ (Grazhdanka)、ラテン文字をモデルとした民衆文字であり、今日最も一般的な形式、アンティクア (Antiqua)）。一八世紀後半には、グラジダンカで書かれたロシア語が、教会スラヴ語とモスクワ方言を元に標準化された。文学や行政におけるロシア語の使用は、一九世紀の前半に広まった。この世紀の後半には、ロシア語は、西部諸州においてドイツ語とポーランドに取って代わった。ベラルーシ語とウクライナ語は（偉大な）ロシア語の「価値のない農奴の」方言とされたため、禁止された。エストニア語、ラトヴィア語、リトアニア語、キリル文字のモルドヴィア語（モルドヴァ語）の初等学校における初歩の使用は一九〇五年までには廃止された。そして、ドイツ語とポーランド語が、教育言語として再導入された (Haugen 1966; Hoch 1985 & 2000)。

オスマン帝国では、住民は、領域ではなく宗教的に定義されたミッレトに区分された。したがって、ギリシア・スラヴ・トルコ・アルバニア語を話す正教徒は正教ミッレトに属し、これらの話者でイスラム教徒はムスリムミッレトに属した。後者のミッレトの行政語は、帝国の公用語と同じで、アラビア文字で書かれたオスマン語であった。ビザンティウム

を権威とする正教ミッレトでは、スラヴ語地域の低位典礼や初等教育では教会スラヴ語の使用が容認されていたが、ギリシア語が支配的であった。一八世紀にはスルタンは、ワラキアとモルドヴィア（ルーマニア南部・東部）において、現地のルーマニア人支配者を、より忠実なコンスタンティノープルからのギリシア人行政官に置き換えた。彼らは、公用語として、キリル文字のルーマニア語をビザンティウムのギリシア語に置き換えた。一八二〇年代のギリシア独立戦争によりギリシアが独立すると（一八三二年）、この編成は逆転し、ビザンティウムのギリシア語は唯一の公用語としてオスマン語に置き換わった。

一八一〇年から一九一〇年の期間は、バルカン半島からのオスマン帝国の後退によって特徴付けられる。それは、西欧列強とロシアに助長されて、自立のちには独立した（主に）キリスト教国民国家の勃興のために生じたものである。モンテネグロとセルビアの国民的指導者は、キリル文字の教会スラヴ語で書き、中世の政治体と彼らに割り当てられた正教総主教管区の伝統に言及することで相互のエスニックな相違を強調した。これらの総主教管区は、一四世紀のオスマン帝国への政治体の編入の後も存在し続けた。純粹に言語を基盤として作られたバルカン最初の国民国家はアルバニア（一九一三年）、つまり、アルバニア語を話すムスリム、正教徒、カトリック教徒の政治体、であった。

一八八〇年代、ビザンツ・ギリシア語（カサレヴサ (Katharevousa) もしくは「純化言語 (purifying language)」) を近代ギリシア語 (Demotic, デモディキ) へ置き換える運動がギリシアで展開した。一九一七年から

一九七四年の間、デモディキが永続的に勝利する前には、あるときにはデモディキが、あるときにはカサレヴサが公用語とされた。二つのギリシア語の変種に関して、言語的な差異がエスニックな分裂にも政治的な分裂にも翻訳されなかったので、二つの異なった言語には分岐しなかった。カサレヴサはギリシアの保守側に、デモディキは自由主義側に付いていた。他方で、ギリシア正教会の典礼では、新約聖書の古典ギリシア語が保持された。

同様に、今日まで、教会スラヴ語は、スラヴ正教やギリシアカトリック教会の典礼言語であり続けている。近代キリル文字と現地語に基づいたスラヴ諸言語は世俗の事柄のために選り出された。この新しい傾向は、ロシアからバルカンに広まった。この地域は、ツァーが、キリスト教徒の保護者としての国際的地域を再確認した地域である（オスマン帝国は一七七四年の条約でこれに同意した）。ブルガリア語の標準化は、ロシア語のモデルに従って、教会スラヴ語の要素とソフィア方言の要素を混ぜ合わせたものである。セルビアとモンテネグロで使用されたセルビア語もこの方法で発展した（明らかに、異なる方言を使用していた）。しかし、一九世紀後半には、バルカンの西半分のスラヴ語話者には共通のセルビア・クロアチア語創出という観念が勝利した。しかし、カトリック教徒はこの言語をラテン文字で、正教徒はキリル文字で書いた。アルバニア人は、一九一一年にラテン文字が規定される以前は、自身の言語を、ギリシア文字、ラテン文字、キリル文字、アラビア文字、もしくはそれらの混合物で書くかを決定していなかった。

個人の（通常ナショナルな）同一化にとつての、特定の文字で書かれたエスニックな言語の重要性は、民衆の識字の広がりを高めた。完全な識字率は、一八七〇年代に中央ヨーロッパのドイツ語話者とチェコ人では達成されたが、その他では、第二次世界大戦後の共産主義政権の成立後に初めて達成された。それ以前、識字は、貴族（のちには知識人や中間層）を意味する狭いエリート（しばしばそれは男性のみ）、そして、聖職者、オスマン帝国では「プロフェッショナルなオスマン人」（ムスリム行政官）の特権であった。中央ヨーロッパのカトリック地域では、エリートはラテン語を使い、その知識はギリシアカトリック教会の勃興によつて正教徒の間へも広がった。一八世紀における教会スラヴ語の拒否は、ロシアにおける教育と発展の言語としてのラテン語とドイツ語の上昇を伴っていた。さらに、一八世紀初頭には、フランス語がヨーロッパ全域で洗練された会話の言語として現れた。二次大戦中とその後における凝集的集団としての貴族層の破壊まで、フランス語は中央ヨーロッパとロシアの貴族層の主要な階層言語 (sociolect) として残っていた。オスマン帝国の近代化は一八四〇年代に始まったが、そこでもエリートの間ではフランス語が選択された。

オスマン帝国の近代化によつて、一八六〇年代初頭、セファルディムは、その学校における教育の優先言語としてフランス語を認めた。その影響により、エスニックな言語であるスパニョールの書記や出版は、ヘブライ文字からラテン文字へ転換した。他方で、オーストリア・ハンガリーとロシア帝国では、法的文書と契約におけるヘブライ文字使用の禁止

にもかかわらず、セファルディムは、ヘブライ語やイディッシュの書記においてヘブライ文字を維持した。同時に、ドイツとオーストリアにおけるユダヤ教徒解放やロシアのユダヤ教徒へのロシア語初等教育の確立により、ドイツ語とロシア語は、ポーランド語やハンガリー語とともに、エスニック間コミュニケーションの主要言語となった。しかし、フランスにおけるドレフュス事件（一八九四年）により、多くのユダヤ教徒は、ヨーロッパにおける完全な同化は不可能であると確信した。

その結果、二〇世紀の転換期に、ユダヤナショナルな運動が発展した。その一部は、ヘブライ語を生きた言語として復興させ、パレスチナにその政治体を実際に持ったヘブライ語を話すユダヤ国民を確立することを目指した。また別のグループは、「墮落したジャーゴン」としてユダヤ教徒でさえ罵るイディッシュ語を、許容された別個のマイノリティとしてヨーロッパに留まることを望むアシケナージムの国民語にしようとした。ホロコーストはこの選択肢を無に帰し、近代ヘブライ語 (Leshon Kodesh) 話者のユダヤ人の国民国家であるイスラエルへの道を開いた（一九四八年）。

興味深いことに、アシケナージムとセファルディムの間の言語的分裂を架橋することを望み、のちには中立的なコミュニケーション言語を作ることに目を向けたザメンホフ (E. L. Zamenhof) は、ビャウイストック (Białystok)。当時ロシアで、現ポーランド) 市出身であるが、ロマンス語を基にしたエスペラント語を作った（一八八七年）。この言語は最も成功した人造言語であった。エスペラント語は、国際連盟の公用

語となる可能性があったが、フランスの介入により実現しなかった。戦間期には、エスペラント語は、一九三〇年代までドイツやソ連で大きな人気を博した。その後、ヒトラーとスターリンはこの言語を禁じ、エスペラントイストを「根無し草のコスモポリタニズム」として告発した (Kamussella 2008; ch. 3; Okuka & Krenn 2002; Todorova 1992; Tornow 2005)。

言語的国民国家

第一次世界大戦中、ドイツとオーストリア＝ハンガリーの占領行政はロシア語を禁じ、ロシアの西部諸州におけるキリル文字の使用を認めなかった。公用語としてのロシア語は、ドイツ語とポーランド語で置き換えられた。その際、歴史上初めて、ベラルーシ語 (キリル文字、および、ラテン文字においても)、エストニア語、ラトヴィア語、リトアニア語、イディッシュ語 (ヘブライ文字) が、地方行政および初等・中等教育における教育語として用いられた。この実践は、エスノ言語的な国民運動の連合を促進した。ベルリンとウィーンは、それを利用して、一方で戦後のロシアとの、他方でドイツ帝国とオーストリア＝ハンガリーの間の緩衝地帯を作ろうとしたのである。

戦間期

しかし、オーストリア＝ハンガリーの崩壊、ロシアにおける革命を伴う中欧列強の崩壊は、中央ヨーロッパの政治的再編を導くこととなっ

た。さまざまな国民運動の代表による働きかけにより、西側連合国は、この地域にエスノ言語的な国民国家を作ること合意した。つまり、それは、特有の言語を話す国民（ネイション）のための政治体であり、その言語は他の国民や政治体に共有されないものであった。すなわち、エストニア、ラトヴィア、リトアニア、ポーランド、チェコスロヴァキア、ハンガリー（かつてのハンガリー王国の三分の一）、セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国（一九二九年からユーゴスラヴィア）である。戦間期中央ヨーロッパの唯一の非ナショナルな政体は、自由都市ダンツィヒであり、ここには主にドイツ人が居住していた。短命に終わった独立したベラルーシとウクライナは、ポーランドとソ連によって分割された。しかし、ソ連の政体の行政的分割は、エスノナショナルな連合共和国に基づいており、公用語としての固有言語が認められた。したがって、ウクライナ語はソヴィエト・ウクライナの公用語であった。ソヴィエト・ベラルーシは例外で、ベラルーシ語とロシア語のほかに、イディッシュ語とポーランド語も一九三八年まで公用語同等待語として使用された。このため、戦間期ベラルーシでは三つの文字が使用された。キリル文字、ヘブライ文字、ラテン文字である。

ソヴィエト当局は、政治と社会工学の道具として意識的に言語を用いた。例えば、テュルク諸語話者のムスリムは、ヴォルガ川中流からクリミアやコーカサスにかけて広がっており、今日のカザフスタンから中央アジアでロシア人の人口的に優勢な地位を脅かしていた。そこで、テュルク諸語話者のムスリムネイションの勃興を予防するために、ボルシェ

ヴィキは、タタール語とチャガタイ語という長く確立されていたアラビア文字のテュルク諸語を禁じた。これらの言語は、テュルク系ムスリムの間において広範にコミュニケーションで使用されていた。タタール語の使用はタタルスタンに限られ、他では、新しい言語に置き換えられた。すなわち、アゼリ語、バシキール語、チュヴァシ語、クリミアタタール語、カザフ語であり、それらはその地の方言に基づいて発展した。チャガタイ語は完全に消滅し、その代わりに、カラカルパク語、キルギス語、トルクメン語、ウズベク語が作られた。さらに、一九二三年には、これらの言語の書記に関して、ラテン文字は「進歩の道具」と考えられたため、アラビア文字はラテン文字に置き換えられた。一九三〇年代に、これらの言語での書記では、キリル文字がラテン文字に取って代わった。したがって、実際のところ、書記における変化によって、ソヴィエト連邦のテュルク系ムスリムは、「反動的」アラビア文字で書かれたタタール語とチャガタイ語を読むことは不可能になった。

中央ヨーロッパとソ連における発展により、トルコナショナリストは、彼らの大義は、オスマン帝国のアラビア語地域をあきらめ、トルコ語話者の核をトルコ国民国家にオーバーホールすることによってのみ実現しうると確信した。トルコ共和国は、一九二三年に宣言された。多くのアラビア系・ペルシア系諸言語からの借用で満ちていたオスマン語は、現地語に基づいたトルコ語に置き換えられ、特に一九三〇年代、一九四〇年代には非トルコ語要素は強烈に排除（改革）された。ソヴィエトの言語・社会工学の影響で、一九二八年にトルコ語の書記に関して、

アラビア文字はラテン文字に置き換えられた。この出来事は、ソ連におけるテュルク諸言語のラテン文字のキリル化を引き起こした。トルコからソ連への望ましくないイデオロギー的影響の流入へとつながるラテン文字に基づいたコミュニケーションのチャンネルが開くことをクレムリンが怖れたためである。興味深いことに、ギリシアと同様に、オスマン様式のトルコ語と急進改革的なトルコ語の間の競合は、新しいエスノ言語的分裂に翻訳されず、前者は親イスラムの保守派と、後者は西洋化派（軍隊、自由主義者、社会主義者）と繋がった (Estrakh 1999; Grenoble 2003; Joffe 2003; Kamusella 2006; Shevelov 1989; Smith 1998)。

一つの国民国家には一つの言語という規範的要請は、中央ヨーロッパにおける国家性の正統化に関して非常に重要であったため、チェコスロヴァキア、セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国といった非常に顕著なマルチエスニックな政治体は、チェコスロヴァキア語やセルビア・クロアチア・スロヴェニア語をそれぞれ彼らの公式の国民言語と宣言した。二つの言語は、国制上のフィクションであり、実際には、チェコ語とスロヴァキア語両方がチェコスロヴァキアで使用され、二重書記のセルビア・クロアチア語とラテン文字のスロヴェニア語が王国で使用された。一九二九年のユーゴスラヴィアの宣言の後、セルビア・クロアチア・スロヴェニア語は、ユーゴスラヴィア語として知られるようになった。

エスノ言語的な国民国家は、さまざまな（しばしば超法規的な）政策を行い、エスノ言語的マイノリティの自発的もしくは強制的同化を通じて

中央ヨーロッパの歴史と政治における言語

て、エスノ言語的に同質な住民を作り出そうとした。言語的差異は、イレンティエスムや国家性の非正統性の源となる可能性があるため嫌悪された。この状況において、スロヴァキアの首都のブラチスラヴァ近郊の草の根の多言語主義の二世紀におよぶ伝統は消滅した。かつて、この地域の集落では、主に文盲のクロアチア、ドイツ、ハンガリー、スロヴァキア話者が隣り合って居住していた。これらの住民は、言語的分断を越えるために、ある時期に数ヶ月間互いの子供を交換することで、子供は隣人が話すすべての言語を話せるようになったのである (Liszka 1996)。

戦間期の中央ヨーロッパにおけるエスノ言語的国民国家への分裂は、第二次世界大戦期に容易に覆された。その際、ドイツ語とロシア語が、この地域の北半分において、公用語として他の言語に置き換わった。チェコスロヴァキアの解体とスロヴァキア語を公用語とする独立スロヴァキアの成立は、チェコスロヴァキアの終わりを意味した。同様に、クロアチアとドイツが支配するセルビアへとユーゴスラヴィアが解体されたことは、ユーゴスラヴィア語の終わりを告げるものであった。クロアチア語はクロアチアの公用語となり、キリル文字は禁じられた。さらに、戦時にセルビアで使われたキリル文字による言語はセルビア語として知られるようになった。

共産主義期

一九四五年以後、中央ヨーロッパ全域は、ギリシアを除いて、拡大し

たソ連（エストニア、ラトヴィア、リトアニア）、もしくは、ソヴィエトブロック（ブルガリア、チェコスロヴァキア、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア）、もしくは、少なくとも初期はソヴィエトの影響圏（アルバニア、ユーゴスラヴィア。ユーゴスラヴィアはモスクワとの断絶後でさえ共産主義政体を保持した）にあった。戦間期と戦後の一九五〇年まで、大規模な境界変更と多方面にわたる民族浄化が行われた。およそ四七〇〇万人が追放され、退去させられた。この行為の最も目に見える結果は、中央ヨーロッパにおけるドイツ語話者と地域のエスニック間コミュニケーションの主要言語としてのドイツ語の消滅であった。

ナチスドイツによるホロコーストは、五〇〇万人のユダヤ人と五〇万から一〇〇万人のロマ（ジプシー）の命を奪った。ソヴィエトブロックにおける反セム主義の再度の波は、ユダヤ人の生き残りをイスラエルか西欧へ送ることとなった。ロマのエスノ言語的特殊性はソヴィエトブロックでは否定された。彼らは、「ルンペンプロレタリアート」（労働者の最低の、最も墮落した層）であり、その伝統的生活様式は強制的な定住化（sedantization）によって破壊された（Bakker & Kyuchkov 2000; Magocsi 2002: 186, 189-193）。

このように、中央ヨーロッパの国民国家において、予想できなかったレベルでエスノ言語的な同一性が達成された。ダンツイヒ自由都市の非ナショナルな政治体は地図から消滅した。チェコ人とスロヴァキア人の二つの兄弟ネイションから構成されるチェコスロヴァキア民族という戦後の国制的構成物は、スロヴァキア人からは、チェコ人のチェコスロヴ

アキア支配の永続性の道具としてみなされた。一九六九年、政治体は、純粋なチェコスロヴァキアの二言語主義をとった二国民の連邦へとオーバーホールされた。エストニア、ラトヴィア、リトアニアは、ソ連に併合されたが、それぞれの言語を公用語兼国民言語とするソ連の構成共和国となった。そして、通常キリル文字はこれらの言語に課されなかった。しかし、ソヴィエト連邦の住民を、「国際言語」（もしくはinterlanguage）としてのロシア語を話す、潜在的に地球規模の共産主義人民（もしくはネイション）へと変えるというイデオロギー的衝動は、三つのバルト共和国の迅速なロシア化を意味したのであった（Barbour & Carmichael 2000; Grenoble 2003; Tsayev 1977）。

ユーゴスラヴィア人や国家の単一的性格という国制的フィクションは、戦後のユーゴスラヴィアを維持することはできなかった。政体は連邦化された。新しく形成されたキリル文字のマケドニア語とスロヴェニア語はユーゴスラヴィアの共通語としては除外され、それぞれマケドニアとスロヴェニアのユーゴスラヴ共和国の公用語・国民語となった。公式には、セルビア・クロアチア／クロアチア・セルビア語という名を持つ言語が、他の共和国の共通言語と維持された。しかし、それは、クロアチアではラテン文字、セルビアではキリル文字、ボスニアとモンテネグロでは双方で書かれた。しかし、言語の方言的基礎は、これらの四つの共和国において、法で規定されたように、少しずつ異なっていた。セルビアのコソヴォ自治共和国（自治州…訳者、以下同）において、アルバニア語は公用語同等言語であったが、セルビアの他の自治共和国（自

治州)であったヴォイヴォディナでは、この地位はハンガリー語、スロヴァキア語、ルーマニア語、ルシン語によって占められていた。同様なソヴィエト式の自治地域として、ルーマニアにおけるハンガリー人地域があった。ここではハンガリー語が公用語同言語であったが、この自治地域は短命に終わった(一九五二年―一九六八年)(Greenberg 2004; Lucić 2002)。

共産主義後

ポストソヴィエト諸国家

一九八九年の共産主義の崩壊により、国家性の正統性の存立イデオロギーとしての共産主義もまた終焉を迎えた。このため、理論的には非ナショナルな共産主義政治体であるソヴィエト連邦は、一五のエスノ言語的な国民国家に分解することとなった。中央ヨーロッパでは、ベラルーシ、エストニア、ラトヴィア、リトアニア、モルドヴァ、ウクライナが含まれる。エスノ言語的国民的政治体への転換は、バルト三国で最も成功した。バルト三国には、ロシア語話者がエストニアとラトヴィアにそれぞれ三分の一ほどいたが、ロシア語は公用語ではなかった。ウクライナでは、ラテン文字を用いるクリミアタール語とロシア語を公用語同言語とするクリミア自治共和国が作られた。ベラルーシでは、一九九一年から一九九五年にベラルーシ語が唯一の公用・国民言語とされたが、その後、ロシア語が公用語同言語とされた。ロシア語は実際には支配的言語であり、効果的に政治体を脱ベラルーシ化した。したがって、

中央ヨーロッパの歴史と政治における言語

現在のところ、ベラルーシは、国家性の正統性が言語から引き出されていない中央ヨーロッパ唯一の国民国家である。脱共産主義化したソヴィエト主義が、国家の正統性として機能しているのである。

モルドヴァでは、モルドヴァ語書記においてキリル文字がラテン文字に置き換えられ、モルドヴァ語はあらゆる面においてルーマニア語と同一となった。このことは、ルーマニアとの統一への衝動とあいまって、ドニエストル川東岸に居住するロシア語話者を疎外することとなった。

一九九二年ロシアの援助で、ロシア語話者は分離戦争を行い、トランスニストリア(Transnistria、沿ドニエストル共和国)という承認されていない政治体を築いた。トランスニストリアは、ベラルーシ同様、その正統性を言語ではなく、脱共産主義化したソヴィエト主義から引き出している。市民は「マルチナショナルな人民」(ソヴィエト連邦のソヴィエト人民/ネイションを思い起こさせる)と定義され、他方でキリル文字のモルドヴァ語、ロシア語、ウクライナ語が公用語同言語となった。

重要なことは、これらすべてが同じ文字によって統一されていることである。このことは、おそらく、ロシア連邦領土に土着の「人民」(ネイション、エスニックグループ)の言語の書記にキリル文字を課したクレムリンの二〇〇二年の決定を反映している。(この連邦法は、タタルスタン共和国におけるタタル語の書記をキリル文字からラテン文字に転換させるという決定の実行を防ぐために通過された。この決定において、タタルスタンは、ポストソヴィエトのアゼルバイジャン、キルギスタン、トゥルクメニスタン、ウズベキスタンにおける書記の変化を模倣

しようとした。)

モルドヴァの領域的統一性を再確立する努力において、トランスニストリアに自治が許容され、モルドヴァ語(国制的にはルーマニア語と別個のものであり続けている)は国家の公用語であり続けている。さらに、ガガウジアの自治地域が、ガガウズ人つまりテュルク系言語話者の正教徒のために設立された。彼らの言語はトルコ語に近い。ソヴィエト期には、キリル文字がガガウズの書記で使用されたが、今日はラテン文字が使われている。ガガウジアでは、ロシア語も公用語同等言語として認められている。

チェコスロヴァキアとユーゴスラヴィアの運命

一九九三年、チェコスロヴァキアは、チェコ共和国とスロヴァキア共和国という二つのエスノ言語的な国民国家に分裂した。興味深いことに、そのとき史上初めてチェコ語はチェコの地における唯一の公用語となった(以前は、その役割をドイツ語とスロヴァキア語も共有していた)。ユーゴスラヴィアの解体には、流血の戦争と民族浄化の波が続いた。最終的には、一九九八年から二〇〇八年の過程は七つの政治体を生み、そのうち六つはエスノ言語的国民国家であった。その六つは、ボスニア、クロアチア、マケドニア、モンテネグロ、セルビア、スロヴェニアである。エスノ言語的ナショナルリズムの規範的パラダイムに適應するために、以前の共通言語であるセルビア・クロアチア語は、ラテン文字のボスニア語とクロアチア語、キリル文字のセルビア語、両文字表記の

モンテネグロ語に分裂した。(一九二〇年から二〇〇八年の間に、公式のセルビア・クロアチア・スロヴェニア語(ユーゴスラヴィア語)から六つの言語が生じた。すなわち、ボスニア語、クロアチア語、マケドニア語、モンテネグロ語、セルビア語、スロヴェニア語である)。実際のところ、セルビアにおける出版物のおよそ半分がラテン文字である。ラテン文字のセルビア語は、自由主義的・親ヨーロッパ的なセルビア人が使用し、公式のキリル文字はナショナルリストと保守派が使用している。

ボスニアはエスノ言語的国民国家の通常のパラダイムには適合しない。というのは、この政治体は、ボスニア・ヘルツェゴビナ連邦とスルブスカ(セルビア人)共和国から構成されるためである(セルビア共和国と混同してはならない)。前者ではボスニア語とクロアチア語が使われ、両者はラテン文字でかかれる。他方、後者ではキリル文字のセルビア語が使用される。当初ボスニアでは、言語ではなく宗教的差異(非宗教的な個人の場合には宗教的遺産に帰せられる)が、ボスニア人、クロアチア人、セルビア人―それぞれムスリム、カトリック、正教徒として解釈される―の間の差異化のために使われた。今では、エスノ宗教的差異が言語的な差異へと翻訳されている。(時折ボスニア人とその言語は「ボスニアク(Bosniak)」として言及され、「ボスニアの」というラベルはエスニック、宗教、言語的差異に関わりないボスニアの市民全体について述べるために保持されている。)同様に、セルビアも、エスノ言語的国民国家のモデルではない。それは、ヴォイヴォディナ自治共和国(自治州)があるためであり、そこでは、セルビア・クロアチア語の分

裂の後、セルビア語という新しい国家規模の言語とともに、クロアチア語が四つの公用語同等言語に加えられたためである。

コソヴォは、ユーゴスラヴィアの解体から生じた唯一の非エスノ言語的国民国家であり、今日の中央ヨーロッパにおいてそのような性格を唯一認められている。政治体の事実上の公用語・支配的言語はアルバニア語であり、コソヴォのアルバニア話者は自身をアルバニア人と定義している。このため、コソヴォは第二のアルバニア人の国民国家であり、単一の言語の話者が国民を形成し、単一の国民国家に居住するという中央ヨーロッパのエスノ言語的ナショナリズムの暗黙の前提を明らかに侵害している。二〇〇八年のコソヴォ憲法は、国家の公用語同等言語の地位をセルビア語に与え、他方、ローカルレベルでは、ボスニア語、ロマニ語、トルコ語も公用語同等言語とされた。

しかし、コソヴォ語へと翻訳されうる言語的差異は存在しない。アルバニア語には二つの方言がある。アルバニア南部で話されているトスク(Tosk)方言とアルバニア北部とコソヴォで話されるゲグ(Gheg)方言である。この二つの方言は、オランダ語とドイツ語、ポーランド語とロシア語と同程度の差異がある。三分の二のアルバニア人はゲグ方言を話す。標準アルバニア語―すなわち共産主義アルバニアで戦後標準化された言語―は、トスク方言から生まれた。今日の標準アルバニア語は、より強くゲグ方言と組み合わせり、コソヴォでの刊行物ではゲグ方言で置き換えられてさえている。しかし、大半の人が同意するように、ゲグ方言をコソヴォの別個の言語に転換するよりも、ゲグ方言を標準語とする

ことの方により大きな可能性がある (Greenberg 2004; Kamusella 2008; Pipa 1989)。

将来

チェコ語とスロヴァキア語同様、ポストセルビア・クロアチア語の四つの言語すべては相互に理解可能であることを述べておくことは重要である。しかし、時とともに、異なる言語的実践と国境によって強化された分断のために、新しい国家で生まれ育ったこれらの言語の話者の間では徐々に相互理解ができなくなるかもしれない。この現象は既に、チェコスロヴァキアのバイリンガリズムにさらされたことのない若い世代のチェコ人とスロヴァキア人で明らかになっている。他方で、政治的レベルでは、そのような差異化のプロセスは、通常外部から、否定されたり、反対される。たとえば、ルーマニアは(多くのロマン語話者のモルドヴァ人市民とともに)、モルドヴァ語の分離を認めなかった。モルドヴァ語は、わずかな地域主義とロシア語の言語的借用物が入り混じったルーマニア語そのものと考えられているためである。同様なスタンスを、ブルガリアはマケドニア語にとった。マケドニア語は、セルビア式のキリル文字で書かれ、トルコ性(Turkicism) (むしろオスマン性。今日のトルコのトルコ語話者には分らないため)が吹きかけられたブルガリア語と考えられた。

二〇〇四年と二〇〇七年のヨーロッパ連合(EU)の拡大のための二つの継続的なラウンドにおいて、一〇の中央ヨーロッパの言語的国民国

家がE.U.に参入した。それぞれの国民語は、連合の公用語にもなった。これらの言語は、ブルガリア語、チェコ語、エストニア語、ハンガリー語、ラトヴィア語、リトアニア語、ポーランド語、ルーマニア語、スロヴァキア語、スロヴェニア語である。二〇〇七年以前、ラテン文字とギリシア文字の二つの文字がE.U.で公式使用されていた。ブルガリアの参入により、これにキリル文字が加わった。

英語

経済的・文化的・社会的諸関係やツーリズムの大きな発展は、ポスト共産主義の中央ヨーロッパにおいて、効果的なコミュニケーションの手段についての合意を必要とした。それは、国民的に条件付けられた単一言語主義（モノリンガリズム）を強化する傾向があったソヴィエトブロックにおける孤立した半世紀のために、準備されていなかったのである。一九九〇年代、英語がこの地域におけるエスニック間コミュニケーションの主要言語の役割を担うこととなった。中央ヨーロッパの住民たちは、英語が現在世界規模のコミュニケーションの唯一の言語であるという実用的な理由で英語を選択した。他方で、彼らは、ドイツ語とロシア語という以前の二つの地域のリンガ・フランカを避けた。それぞれナチズムと共産主義の暴虐と不可避的に結びついているためである。フランス語は、第二次世界大戦以前、地域のエリート階層言語であり、ロマンス語であるルーマニアやバルカンのいたるところでは、共産主義期でさえ一般的なリンガ・フランカであった。しかし、現在はこの地位は

英語に取って代わられている。

中央ヨーロッパにおける広域コミュニケーション言語としての英語の特権的地位は、近年、ボスニアとコソヴォにおける暫定国際英語行政の設立、および、両政治体からのアメリカ合衆国やイギリスへの難民の流れによって強化された。今日では、かつての避難民やその子孫は、英語をネイティブのように話し、定期的に居住国とその出身地の間を往復している。この現象は、中央ヨーロッパからの三〇〇万から四〇〇万のE.U.内移民においてより大規模で繰り返されている。彼らは、二〇〇四年以後、主にイギリスとアイルランドの英語圏政治体に移動してきた。イギリスやアイルランドよりも地理的にははるかに近いドイツ、オーストリア、フランス、イタリアといった他の以前からのE.U.構成国は、中央ヨーロッパの移民にその労働市場を閉ざすことを選んだ（これは二〇一一年まで続いた）。このため、中央ヨーロッパにおいてエスニック間言語としてのフランス語とドイツ語を復活させるという可能性はおそらくなくなった。

忘れられた言語

ロマニ語

共産主義の崩壊の波の中で、中央ヨーロッパの多くの国のロマの知識人と指導者たちは、ロマの経済的・社会的窮状を訴え、さらにロマニ語を成文化し、ロマニナショナル文化を作り出すために協力し始めた。最初のロマニ語での出版の試みは戦間期のソ連（キリル文字）と共産主義

期のユーゴスラヴィア（これもキリル文字）で行われた。世界で一〇〇〇万から一二〇〇万人のロマの三分の二は中央ヨーロッパ、主にバルカン半島、ルーマニア、ハンガリー、スロヴァキアで生活している。ロマは、通常それぞれの生活している政治体で最も一般的な宗教を信仰している。つまり、中央ヨーロッパでは、カトリック、正教、イスラム教、まれにプロテスタントイズムを信仰している。同様に、ロマは自身が生活する政治体の国民語の文字で書く傾向がある。すなわち、キリル文字、ギリシア文字、ラテン文字である。何世紀もの迫害にもかかわらず、ロマの少なくとも半分はロマニ語を話している。さらに、ロマは、特定の慣習、生活様式、同族結婚などにより、そのエスニックな差異を維持している。その文化伝統の口承性は、ロマニ語を書記言語化するのに障害となっている。ロマニ語のさまざまな成文化は、異なる方言に基づき、それぞれキリル文字、ラテン文字、ギリシア文字を使用したものが中央ヨーロッパの諸政体で作られてきた。興味深いことに、ロマニ語のウィキペディアはラテン文字とデヴァナーナガリー (Devanagari) のインド文字で利用できる。これは、一つのインドの民族としてロマを認め、支援するというニューデリーの一九七〇年代の政策の反映である。

ロマニ語を教育言語として通常の学校はない。しかし、マイノリティの言語として徐々に認められてきている。現在、ロマニ語が公用語として使われている世界で唯一の場所は、マケドニアの首都スコピエの行政区域内にあるシュト・オリザリ区 (Shuto Orizari) である。また、コソヴォ憲法によれば、コソヴォのさらなる自治体がロマニ語を公用語

同等言語として採用する可能性がある。ロマニ語は、インドやパキスタンのインド・ヨーロッパ語族を構成するインド支族のインド・ヨーロッパ言語である。

国民的少数派の言語

中央ヨーロッパにおけるエスノ言語的国民国家の構築は、その政治体内部における住民のエスニック的・言語的同一化を必要とする。次のステップは、国民言語という公的な標準を広げることであった。つまり、方言的多様性の消去である。民衆教育、徴兵、ラジオやテレビという新しく、徐々に偏在しつつあるマスメディアはこの目的に使われた。しかし、頻繁な境界変更、いまだ残っている歴史的・宗教的遺産、言語的・エスニック的差異による迫害（標的とされる集団によって不当とみなされる）は、人々を同質化し、方言的差異を廃止するといった国家の努力を繰り返し無に帰してきた。このことは、最も頻繁に所有者が変わる境界地域で特に起こった。

ソヴィエトの是認により、中央ヨーロッパの共産主義体制は、その正統化の手段として、エスノ言語的同質化を行ってきた。共産主義の崩壊後、民主化により、生き残っていたエスノ言語的・方言的差異についてより自由な表現が可能となり、しばしば、政治的目標のために展開され始めた。それは、言語的に定義された国民的政治体が地域の政治的組織の根拠であり続けていたという事実のためである。この復活に屈服し、また西側の圧力の下で（フランスで組織されたバラデール計画

(Balladur Plan) という形式で表現された、一九九〇年代に、大半の中央ヨーロッパの諸国家は隣国と双務的な条約を結び、隣接の政治体の国民とエスノ言語的に関係のある国民の少数民族を承認し、保護することに同意した。ヨーロッパ評議会（原文は European Council であるが、Council of Europe : 訳者）は、一九九八年に発効した国民的少数派の保護の枠組み条約で、このプロセスを完成させた。

国家のないナショナル・エスニックマイノリティ、地域、および、

移入民の諸言語

しかし、このステップは、国家のないナショナル・エスニックマイノリティや地域や移入民の諸言語を承認し、再確認することはできなかった。このような諸言語は、言語と国家を容易に同一視できるようなエスノ言語的な国家によっては保護されない。この問題は徐々に認識され、ヨーロッパ評議会と一九九八年に発効したヨーロッパ地域・少数民族言語憲章によって表明された。少数民族使用言語に関するヨーロッパ事務局 (European Bureau for Lesser Used Languages (EBLUL)) とらう NGO は、一九八二年にダブリンで設立された。(まず当初は、アイルランドの公用語同等言語であるアイルランドのケルト語を EU の公用語にすることを目指し、それは二〇〇八年に達成された)。この NGO は、これらの言語の承認と使用を援助するために EU とヨーロッパ評議会と密接に協力している。しかし、すべてがなされたとしても、そのような言語を承認する実際の決定権は、それらの言語が話されている領域を所有してい

る国家が排他的に握っている。驚くことではないが、多くの中央ヨーロッパの国民国家は、エスノ言語的な同質性（もしくははその幻想）に多くを投資してきたのであり、そのような承認を与えなければならないのである。

中央ヨーロッパでは、エスニック・地域的小言語が、かつてのハンガリー王国の境界地域に多数あり、それらはすべてスラヴ系言語である。すなわち、キリル文字のルシン語（現在のスロヴァキア東部、ハンガリー東部、ウクライナ南西部、セルビアのヴォイヴォディナ）、ラテン文字によるパウリシア語 (Pulician、現在のブルガリア語と同起源、ルーマニア東部)、ブニェヴァツ語 (Bunjevician、セルビアのヴォイヴォディナ)、チャ語 (Cakavian、チャ方言) とカイ語 (Kajkavian、カイ方言) (クロアチア西部)、プレクムリエ語 (Prekmurjan、スロヴェニア東部)、ブルゲンラントクロアチア語 (オーストリア東部) である。これに属する更なる二つの言語はすでに、それぞれの国民国家の完成で国民言語として完全に承認されるようになった。それは、ボスニア語とスロヴァキア語である。西ロマンス連続体と南スラヴ連続体の接触地域では、スラヴ系言語のモリーゼ語 (Molisean、クロアチア語と同起源) とレージア語 (Resian、スロヴェニア語と同起源) が、今日イタリア北東部に出現した。

イタリア南部とシチリア島では、ラテン文字のアルベレシュ語 (Arberesh) が話され、他方、ギリシア文字のアルヴァンティカ語 (Arvanitika) がギリシア中部で話されている。両者は、アルバニア語、もしくはそのトスク方言と同起源である。西ロマンス連続体と東ロマン

ス連続体の間の連結点となっているロマンス語話者の残りは、今日、ギリシアやブルガリアからクロアチアのイストリアまでのバルカン半島中にまばらに広がっている。その三つの別個のグループは、アルーマニア人 (Aromanians)、メグレノ・ルーマニア人 (Megleno-Romanians)、イストロ・ルーマニア人 (Istro-Romanians) と呼ばれている。(前者二つは「ヴラフ」とも呼ばれている)。その書記はラテン文字、ギリシア文字、キリル文字でさまざまに行う。ブルガリア南部では、そして、ギリシア北部境界地域では、ムスリムのスラヴ語話者であるポマク (Pomak) がいる。ポマク語の書記も三つのアルファベットを使用する。

西ゲルマン語連続体と北スラヴ方言連続体のかつての接触地域では(一九四五年以降、民族浄化のためにオーデル・ナイセ線に移動した)、以下のスラヴ系言語(語彙、統語法、音韻論でゲルマン語の影響を強く受けていた)があった。すなわち、マズール語(現在のポーランド北部)、カシューブ語(ポーランド北部)、ソルブ語(ドイツ東部)、シレジア語(ポーランド南部、チェコ共和国北東隅)、モラヴィア語(チェコ共和国南東部)である。現在のベラルーシ、ポーランド、ウクライナ国境の合流地点では、キリル文字とラテン文字の複数書記であるポレーシヤ語 (Polesian) があった。同様に、ゴラリア語 (Goralian (ポドハラニエ語 (Podhalanian))) が、タトラ山地のポーランドとスロヴァキア境界地域にあった。

ラトヴィアとリトアニアでは、かつてのラトヴィア語とリトアニア語のかつての並行的な方言的基礎を持つ言語が復活している。すなわち、

中央ヨーロッパの歴史と政治における言語

ラトヴィア東部におけるラトガリア語 (Latgalian) とリトアニア西部のサモギティア語 (Samogitian) である。重要なことに、ラトガリア語とサモギティア語の話者は、ラトヴィア語とリトアニア語話者のそれぞれ三分の一になるといふことである。ラトヴィアは、リガ湾の北東沿岸を、言語的重要性よりも文化ツーリズムの重要性から、リヴォニアの歴史的領域として保護している。リヴォニアのフィン・ウゴル系言語の話者の残りは五〇人以下であるためである。エストニアでは、南部エストニア語がエストニア語のかつての方言的基礎として使われることで復活している。さらに今日、二つの密接に関連のある異種が現れている。一つは、ヴォロ (Võro) とその近郊のエストニア大都市のルター派住民によって使用される言語で、もう一つは、セトウス (Setus) と自らを呼ぶロシア境界を越えて住むフィン・ウガロ語話者の正教徒によって使用される。そのため、この言葉は、ヴォローセトウ語 (Võro-Seto) として言及されている。

ロマニ語、イディッシュ語、スパニョール語以外の言語が、中央ヨーロッパのディアスポラによって使用されている。最も重要なものは、カライム語 (Karaim) とアルメニア語である。前者は、カライテ (Karaites、カライム) の言語である(クリミアタタール語およびクリムチャク語つまりクリミアユダヤ教徒のヘブライ文字の言語に近い)。カライテとは、ユダヤ教に近い宗教(カライ派、Karaim) を信仰しているテュルク語話者コミュニティであり、ヘブライ文字を用いる。伝統的アルメニア人ディアスポラは、典礼で使用されるグラバル (Grabar) (アルメニア語

訳聖書の古典的言語)の知識を限定的にしか持っていない。しかし、共産主義の崩壊後、近代アルメニア語を話すポストソヴィエトの多くのアルメニア移民がそこに加わった。共産主義期を通じて、アジアの共産主義国家とのソヴィエトブロックのイデオロギー的協力の一環として、ヴェトナム人や北朝鮮人の移民コミュニティが中央ヨーロッパに出現した。今日、そこにさらなる移民(避難民)コミュニティが加わっている。とりわけ、チェチェン人、中国人、グルジア人、インド人(主に、ヒンディ語とパンジャブ語話者)、カザク人、ナイジェリア人、ロシア語話者、ウクライナ人である。

上に述べた言語のいくつかは、小さく、弱く、死にかかってさえいる。通常、政治的重要性はほとんどもしくは全くない(イストロ・ルーマニア語、リヴォニア語、マズール語、メグレノ・ルーマニア語、モリーゼ語、パウリシア語、ポレーシャ語、プレクムリエ語、レージア語)。また、国家のないネイションの国民言語として承認されているものもある(アルマニア語、ソルブ語、ルシン語、ルシン語はポーランドではレムキア語(Lemnian)として知られている)。また、自身の国民国家を享受する国民の内部の特定の地域のグループとして認識されているものもある(チャ語、ゴラリア語、カイ語、カシューブ語、ラトガリア語、サモギティア語もしくはヴォローセトウ語)。また、自身をネイションに変えるという明確な欲求を表現しない個別のエスニックグループとして構成されるものもある(アルベレシユ語、アルヴァンティカ語、ブルゲンラントクロアチア語、チャ語、カイ語、カシューブ語、ポマク語)。不

幸なことに、移民や避難民コミュニティの言語が承認されたり、行政や学校で使用されたりすることはなく、中央ヨーロッパ社会への彼らの統合は容易ではない。

興味深いことに、シレジア人は、今日のポーランドにおいて最大のエスニックもしくは国民的少数派を構成している(二〇〇二年のポーランド国勢調査による)が、彼ら自身およびその言語は国家で承認されていない。ゴラリア語も同様に承認されていない。フランスの例を模倣してギリシアは、トルコ語を除いて、その領域における少数派や少数者言語を決して承認しない。ブルガリアは、ポマク語をブルガリア語の方言と考えている。ポマクは、多くのトルコ主義的要素を持つ言語であるために、通常ブルガリア国民の共通性から排除されているにもかかわらずである。ルーマニアは、アルマニア語、イストロ・ルーマニア語、メグレノ・ルーマニア語は、ルーマニアの南部方言と主張している。しかし、三つの言語の話者たちはその見解を異にしている。チャ語とカイ語は、ボスニア語やモンテネグロ語以上に標準クロアチア語とは異なっているが、それにもかかわらず、クロアチア語の方言として解釈されているのである。(Blanke 2001; Dulichenko 2003-2004; Hannan 1996; Kamusella 2008; ch. 3; Magocsi 1996; O'Reilly 2001; Tornow 2005; Wicherkievich 2003)。

- Baker, Peter and Kyuchkov, Hristo, eds. 2000. *What is the Romani Language?* Hatfield, Hertfordshire: Gypsy Research Center and University of Hertfordshire Press.
- Barbour, Stephen and Carmichael, Cathie, eds. 2000. *Language and Nationalism in Europe*. Oxford: Oxford University Press.
- Blanke, Richard. 2001. *Polish-speaking Germans? Language and National Identity among the Masurians since 1871* (Ser: Ostmitteleuropa in Vergangenheit und Gegenwart, edited by Herder-Institut, Marburg, vol 24). Cologne, Weimar, Vienna: Böhlau Verlag.
- Burke, Peter. 2004. *Languages and Communities in Early Modern Europe*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dulichenko, Aleksandr D. 2003–2004. *Slavianskie literaturnyye mikroiazyki. Obrazny tekstov* (2 vols.). Tartu: Izdatelstvo Tartuskoگو universiteta.
- Estraikh, Gennady. 1999. *Soviet Yiddish: Language Planning and Linguistic Development* (Ser: Oxford Modern Languages and Literature Monographs). Oxford: Oxford University Press.
- Fine, John V. A. 2006. *When Ethnicity Did Not Matter in the Balkans: A Study of Identity in Pre-Nationalist Croatia, Dalmatia, and Slavonia in the Medieval and Early-Modern Periods*. Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Fishman, Joshua. 1973. *Language and Nationalism: Two Integrative Essays*. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- Gellner, Ernest. 1983. *Nations and Nationalism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Greenberg, Robert D. 2004. *Language and Identity in the Balkans: Serbo-Croatian and its Disintegration*. Oxford: Oxford University Press.
- Grenoble, Lenore A. 2003. *Language Policy in the Soviet Union* (Ser: Language policy, vol 3). Dordrecht: Kulwer.
- Hannan, Kevin. 1996. *Borders of Language and Identity in Teschen Silesia* (Ser: Berkeley Insights in Linguistics and Semiotics, vol 28). New York: Peter Lang.
- Haugen, Einar. 1966. Dialect, Language, Nation (pp 922–935). *American Anthropologist*. No 68.
- Hroch, Miroslav. 1985. *Social Preconditions of National Revival in Europe: A Comparative Analysis of the Social Composition of Patriotic Groups among the Smaller European Nations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hroch, Miroslav. 2000. *In the National Interest: Demands and Goals of European National Movements of the Nineteenth Century: A Comparative Perspective*. Prague: Faculty of Arts, Charles University.
- Ioffe, Grigory. 2003. Understanding Belarus: Questions of Language (pp 1009–1047). *Europe-Asia Studies*. No 7 (London: Carfax Publishing).
- Isayev, Magomet Izmailovich. 1977. *National Languages in the USSR: Problems and solutions*. Moscow: Progress.
- Kamussella, Tomasz. 2001. Language as an Instrument of Nationalism in Central Europe (pp 235–252). *Nations and Nationalism*. No 2, Apr. London: Blackwell and Association for Study of Ethnicity and Nationalism.
- Kamussella, Tomasz. 2004. On the Similarity Between the Concepts of Nation and Language (pp 107–112). *Canadian Review of Studies in Nationalism*. Vol 31.
- Kamussella, Tomasz. 2006. The Isomorphism of Language, Nation, and State: The Case of Central Europe (pp 57–92). In W. Burszta, T. Kamussella, and S. Wojciechowski, (eds.), *Nationalisms across the Globe: An Overview of Nationalisms of State-Endowed and Stateless Nations* (Vol. 2. The World). Poznań, Poland: Wyższa Szkoła

Nauk Humanistyecznych i Dziennikarstwa.

Kamussella, Tomasz. 2008. *The Politics of Language and Nationalisms in Modern Central Europe*. Basingstoke, Hampshire: Palgrave.

Liszka, József. 1996. Das Tauschkind-System im slowakischen Teil der Kleinen Tiefebene (pp 58–72). *Zeitschrift für Balkanologie*. No 32.

Lučić, Radovan, ed. 2002. *Lexical Norm and National Language: Lexicography and Language Policy in South-Slavic Languages after 1989* (Ser: Die Welt der Slaven, vol 14). Munich: Verlag Otto Sagner.

Magocsi, Paul Robert, ed. 1996. *A New Slavic Language Is Born: The Rusyn Literary Language of Slovakia* (Ser: East European Mobographs, vol 434; Classics of Carpatho-Rusyn Scholarship, vol 8). Boulder CO: East European Monographs (distributed by Columbia University Press, New York).

Magocsi, Paul Robert. 2002. *Historical Atlas of Central Europe* (Ser: History of East Central Europe, vol 1). Seattle, WA: University of Washington Press.

Myhill, John. 2006. *Language, Religion and National Identity in Europe and the Middle East: A Historical Study* (Ser: Discourse Approaches to Politics, Society and Culture).

Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Okuka, Mилоš, and Krenn, Gerald, eds. 2002. *Wieser Enzyklopädie des europäischen Ostens* (Vol. 10: Lexikon der Sprachen des europäischen Ostens). Klagenfurt: Wieser.

O'Reilly, Camille C, ed. 2001. *Language, Ethnicity and the State* (Vol. 2. *Minority Languages in Eastern Europe Post-1989*). Basingstoke, Hampshire: Palgrave.

Pipa, Arshi. 1989. *The Politics of Language in Socialist Albania*. Boulder CO: East European Monographs (distributed by Columbia University Press).

Plasseraud, Yves, ed. 2005. *Atlas des minorités en Europe: de l'Atlantique à l'Oural, diversité culturelle* (Ser: Collectio Atlas-Monde). Paris: Autrement.

Schenker, Alexander M. and Stankiewicz, Edward, eds. 1980. *The Slavic Literary Languages: Formation and development* (Ser: Yale Russian and East European Publications, no 1). New Haven: Yale Concilium on International and Area Studies.

Shevelov, George Y. 1989. *The Ukrainian Language in the First Half of the Twentieth Century (1900–1941): Its State and Status* (Ser: Harvard Ukrainian Research Institute Monograph Series). Cambridge, MA: Harvard Ukrainian Research Institute (distributed by Columbia University Press)

Smith, Michael G. 1998. *Language and Power in the Creation of the USSR, 1917–1953* (Ser: Contributions to the Sociology of Language, vol 80). Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Todořova, Maria. 1992. *Language in the Construction of Ethnicity and Nationalism: The Bulgarian case*. Berkeley, CA: Center for German and European Studies, University of California.

Tomow, Siegfried. 2005. *Was ist Osteuropa. Handbuch zur osteuropäischen Text- und Sozialgeschichte von der Spätantike bis zum Nationalstaat* (Ser: Slavistische Studienbücher, Neue Folge. Vol 16). Wiesbaden: Harrassowitz.

Wierkiewicz, Tomasz. 2003. *The Making of a Language: The Case of the Idiom of Włanowice*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.